

【研究論文】

障がいのある者を 同胞にもつきょうだいの進路決定プロセス

——複線径路・等至性モデルによる教員志望の青年期きょうだいの語りの分析——

石塚 千紗*・五位塚和也**

キーワード：障がいのある者の家族 きょうだい 進路決定 複線径路・等至性モデル (TEM)

要約：本研究では、教員を志望する青年期のきょうだいの進路決定プロセスについて明らかにし、きょうだいの進路決定に影響を及ぼす要因について検討することを目的として4名の研究協力者に対してインタビュー調査を行った。きょうだいの進路決定プロセスを時間の経過に伴う変化に着目して検討するために、複線径路・等至性モデル (TEM) を用いた分析を行った。その結果、障がいのある同胞の存在がきょうだいの進路決定に影響を及ぼす一方で、同胞とは異なる他の家族との関係性の変化、教員などの地域社会で経験する自身の人生のモデルとなる重要な他者との出会いが進路決定に大きく影響を及ぼしていることも考察された。また、大学生の時期は支援者という社会的役割を試行する経験を通して、将来に対する不安を抱えながらも、専門的な分野に対して関心を強めることにより、自らの志望する職業に対する現実的な将来展望を形成することが考えられた。

1. 問題

近年の医療の高度化により障がいのある者の長寿化や高齢化も進み、障がいのある者の家族の中でも、障がいのある者の兄弟姉妹が担う役割は益々高まり、親亡き後も生涯に渡って関わりを強くもつ可能性が高い (Meyer, 2009)。そのため、障がいのある者の家族を対象とした研究においても、親のみならず、障がいのない兄弟姉妹を含めた援助のあり方が模索されつつある。このような現状のもとで、障がいのある者の兄弟姉妹はどのような思いを抱きながら、障がいのある者が身近にいる人生を生きているのかを理解することは、障がいのある者の兄弟姉妹を支えるための基盤になるばかりではなく、障がいのある者のサポートのあり方を考える上でも社会的に必要な意義があると考えられる。以下、本稿では障がいのある者を「同胞」、障がいのある者の兄弟姉妹を「きょうだい」と表記する。

*和泉市立和気小学校

**大阪大谷大学教育学部

きょうだいを対象とした先行研究では、きょうだいの心理的適応に関する援助の必要性が取りあげられてきた。障がいのある同胞のきょうだいであることについては、肯定的な影響と否定的な影響があることが示されている（平川、1986）。否定的な側面としては、恥ずかしさや親の関心が同胞に向きやすいこと（Vadasy, Fewell, Meyer, & Schell, 1984）、同胞に対して幼い時から大人のような受容的な態度を求められること（益満・江頭、2002）、同胞の援助者としての役割を担うことが多いこと（Simeonsson & McHale, 1981）など、日常の家庭生活の中でストレスを受けやすい環境にあることが示唆されている。一方で、肯定的な側面として、偏見に敏感であることや忍耐強く慈悲深いこと（平川、1986）、人格的な面の成長があること、同胞を通じて療育や特別支援教育の教師などの人との出会いの豊かさがあること、同胞の存在がきょうだいの進路を導くこと、障がいや福祉、社会について深く考えることなど（藤井、2006）が先行研究で示されてきた。つまり、きょうだいとして同胞と共に育つことは、きょうだいの親子関係や家庭生活を変容させ（西村、2004）、その結果として、成人期以降の生活にも影響を与えたと考えられる。

例えば、山本・金・長田（2000）によると、きょうだいが家族の中で重要な役割を果たせば果たすほど、自分が家族から離れることが難しいと考えてしまうこと、親亡き後の生活についても自分が面倒をみると考えているきょうだいが少なくないこと、進学や就職、結婚などのライフイベントを経験する際に自分と障がいのある同胞との間で葛藤状態に陥ることが示唆されている。また、笠田（2013）は、進路・職業選択の時期が原家族に対する役割転換の時期であり、葛藤体験となりやすいが、親からの働きかけによって主体的なライフコース選択に広がることを示した。このように、障がいのある同胞のきょうだいでいることによって、その個人のライフコースの選択がどのような影響を受け、どのようなプロセスを辿るのか、その際の葛藤やその解決にはどのような要因が影響を及ぼしているのかといったことについての研究は少なく、未だに明らかにされていない領域である。この点について明らかにすることは、きょうだいの主体的なライフコースの選択に対する支援について考えるうえで重要な知見となり得る。

特に、ライフコースの選択が迫られるライフイベントとして進路や就職が挙げられる。これらのライフイベントが含まれる青年期は、過去から現在にわたる自分の人生を振り返り、そのなかで培われた経験を意味づけ、成人期における社会への本格的な参加に向けて準備をするために自らの将来展望を形成する必要がある。しかしながら、先行研究で指摘されるように、障がいのある同胞をもつきょうだいは、健康に生まれたことによる他の家族構成員からの期待や、障がいのある家族への世話役割の負担などにより、家庭内の役割に対する葛藤を抱く者の存在も想定される。そして、このような家庭内の役割葛藤は、障がいのある家族をもつ青年が自身の人生に関する重要な選択をしていくにあたって影響を及ぼすことが考えられる。したがって、本研究では、進路決定というライフコースの選択が求められる青年期のきょうだいを

対象とした。なお、先行研究では障がいのある同胞がいることによる影響として、同胞の援助者としての役割を担うことが多いこと (Simeonsson & McHale, 1981) や、障がいや福祉について深く考えること (藤井, 2006) が指摘されていることから、青年期のきょうだいのなかでも、対人援助職を志望する大学生を対象とした。

また、従来の数量的な方法を用いた先行研究では、障がいのない者のみで構成された兄弟姉妹の中で育った者と、障がいのある同胞をもつきょうだいを比較し、きょうだいが適応しているか否かという一元的な理解にとどまりやすかった。しかしながら、きょうだいであるということは肯定的-否定的側面を超えたより多面的なものであるという観点から、きょうだいの生活体験や思い、その揺らぎを詳細に検討する必要性も指摘されている (大瀧, 2012)。加えて、きょうだいに関する一般の傾向を把握することを目的とした場合、出生順位や性別、家庭状況など、関連する要因が非常に多様であることから、一元的な理解にとどまりやすく、その多様性を捨象してしまうおそれがある。むしろ、きょうだいに生じる事象を一元的に数量化することは困難であり、きょうだいが生きる多様な文脈を理解するために、事象の性質と研究者の関心に合わせて柔軟に捉えることのできる方法論として質的研究を採用することが適当であると考えられた。なかでも、きょうだいの進路決定の多様性について明らかにしながら、時間の経過に伴う変化を捨象することなく捉えるために、複線経路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model; 以下、TEM) を用いた。TEM は個々人がそれぞれ多様な経路を辿っていったとしても、等しく到達するポイント (等至点) があるという考え方を基本とし、人間の発達や人生経路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルである (荒川・安田・サトウ, 2012)。中坪 (2010) は TEM を用いることで、人間の思考や行動、態度、感情の時間的な変化とその多様なプロセスを捉えることが可能であるとしている。

以上を踏まえ、本研究の目的として、障がいのある同胞をもつきょうだいの進路決定のプロセスについて明らかにすることを第一の目的とした。また、きょうだいの進路決定プロセスを検討する際に、きょうだいの主体的な進路決定に影響を及ぼす要因について検討することを第二の目的とした。

2. 方法

(1) 研究協力者

TEM はサンプリングの方法としての歴史的構造化サンプリングに依拠する。サトウ・安田・木戸・高田・Valsiner (2006) は歴史的構造化サンプリングについて「人の経験は歴史的・文化的・社会的な文脈に埋め込まれ構成されているという認識のもと、同じ経験をした人 (厳密に言えば、「同じような」経験をした人) を選ぶ」としている。ここでの「同じ経験」と

Table 1 研究協力者のプロフィール

事例	年齢	性別	同胞の障がい	きょうだいに対する同胞の続柄
A 氏	21 歳	男性	知的障がいを伴う自閉症	弟
B 氏	21 歳	女性	知的障がいを伴う自閉症	弟
C 氏	20 歳	女性	学習障がい	妹
D 氏	21 歳	男性	水頭症・脳原性運動機能障がい	妹

は研究者が研究上焦点化した等至点となる経験のことを指す。つまり歴史的構造化サンプリングとは、研究の目的に合わせて等至点を設定し、その等至点の経験者を研究対象者に選ぶことである。本研究では、目的に応じ、「障がいのある同胞をもつきょうだいである」という経験と、「志望する職業を決定する」という経験を設定し、サンプリングを行った。そこで、某大学の大学生に対して研究協力の募集を示す文書を配布し、募集に応じた教育学部の大学生 4 名（男性：女性＝2：2；平均年齢 20.75 歳）にインタビューを実施した。研究協力者のプロフィールは Table 1 に示した。プロフィールに関しては、プライバシーへの配慮のため、必要最低限度の項目を記載することとした。

(2) データの収集

X 年 11 月から 12 月にかけて、各研究協力者に対して半構造化面接の形式でインタビューを 3 回行った。面接は大学の空き教室などを使用し、それぞれ個別に実施した。インタビューの概要とスケジュールについては、1 回目のインタビュー時に研究協力者に対して伝えた。インタビューは約 1 週間程度の間隔を置いて実施した。インタビューでは、「まず、あなたが初めて将来の夢を意識し始めた頃（考えた）のお話を聞かせてください。」という共通の質問だけおさえ、あとはインタビューの反応や経験に合わせて対話しながら質問を加えた。その際、同意を得た上で研究協力者の語りを IC レコーダーにより録音し、それを筆者が逐語録に書き起こしたものをデータとした。

(3) 分析方法

本研究では、分析方法として TEM として採用した。TEM を用いて分析を行うにあたって、本研究において用いた TEM の主要概念について説明する。

「等至点」とは、多様な径路がいったん収束する点を示し、研究上焦点化される点である。また研究上焦点化された等至点の対となるような地点として「両極化した等至点」が設定される。両極化した等至点とはいわば等至点の補集合的な事象であり、補集合的事象に目が向きにくい研究者にとって両極化した等至点を設定することは、意図せぬ価値づけを未然に防ぐ意味をもつ。径路を描いていく上で、個人の選択に影響を及ぼした社会的要因は「社会的方向付

け：SD」と「社会的ガイド：SG」として表わされる。社会的方向付けとは個人が望んでいない方向へと仕向ける環境要因や文化的な力の総称であり、これに対して社会的ガイドとは個人が望む方向へ支援する力の総称である。

(4) 分析手順

4名に対するインタビューから得られたデータをもとに、以下のプロセスで分析を行った。

まず、各事例の逐語記録を繰り返し精読し、語られた経験を意味のまとまりごとに切片化し、分析における最小単位とした。そして、その内容を端的に表す見出しを付けた。次に、きょうだいの進路決定の経験を時間経過に沿って並べた。特に、多くのきょうだいが体験すると考えられる出来事を必須通過点として定め、TEM図に表した。TEM図への表し方として、切片化した各経験を実線囲み、必須通過点を太線囲み、等至点を二重線囲み、両極化した等至点を点線囲みで表した。また、各経験をつなぐ矢印は、実際に研究協力者から語られた径路を実線で、実際のデータにはよらないが社会通念上、理論的に尊大すると考えられた径路を点線で示した。さらに、社会的ガイドを上向き矢印付きの囲み、社会的方向付けを縦軸の下向き矢印付きの囲みで示し、TEM図に表した。最後に「非可逆的時間」という時間の非可逆性を示す概念をTEM図に明示した。

(5) 倫理的配慮

インタビューを実施する際に、まず実施前に研究の概要と目的を説明した。また、個人情報の保護、研究協力が任意であること、筆記による記録とICレコーダーによる録音を行うこと、インタビューの途中で録音の中断を求めて良いことを説明した上で、文書による研究協力に対する同意を求め、同意が得られた者に対して調査を実施した。

3. 結果

きょうだいの進路決定プロセスについて、個人の生活史に特有の文脈と時系列に沿った経験の分析を行い、その径路を示したTEM図に示した（Figure 1）。そこで、きょうだいの進路決定プロセスについて示したFigure 1のTEM図に関する説明を行う。その上で、きょうだいの進路決定プロセスにおいて重要な分岐点となった経験について述べる。その際、切片化した各経験や必須通過点、等至点を〈 〉、社会的ガイドや社会的方向付けを《 》で記述することとした。

障がいのある者を同胞にもつぎょうだいの進路決定プロセス

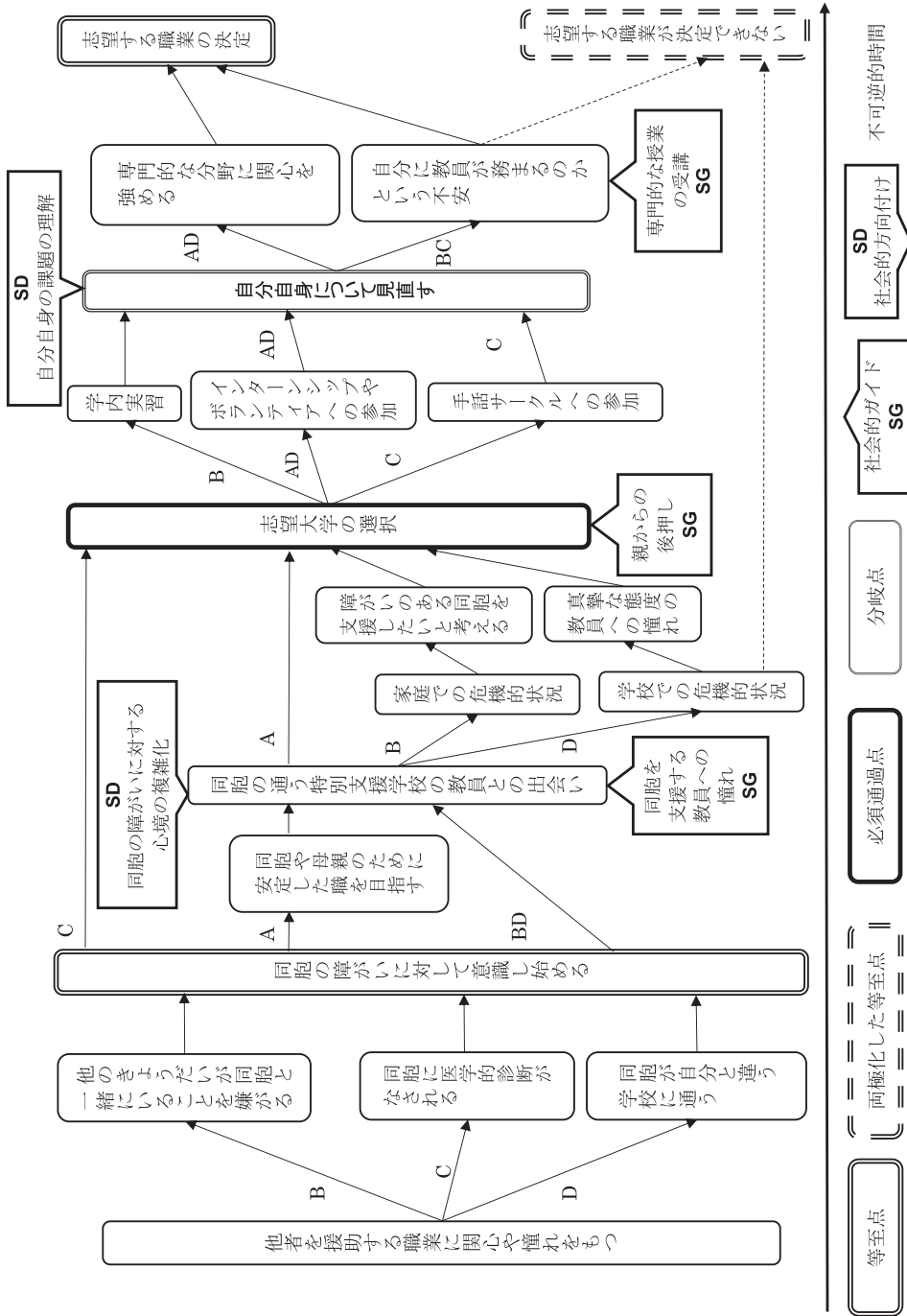


Figure 1 教員を志望する青年期きょうだいの進路決定プロセス

(1) きょうだいの進路決定プロセス

きょうだいの経験の中で、幼児や小学生、中学生の時期など、各研究協力者によって時期やきっかけは異なるものの、同胞の障がいに対して意識し始める経験を研究協力者全員にみられたため、〈同胞の障がいに対して意識し始める〉という経験をまず初めの等至点とした。その後、過去の進路決定プロセスを時間の流れに沿って示した。次に、特に全ての研究協力者がたどった径路を必須通過点として示し、〈志望大学の選択〉とした。そして、大学在学中の期間に、自分自身が抱える課題を意識するなど、〈自分自身について見直す〉という経験を全ての研究協力者が経験しているため、これを必須通過点とした。最後に、〈志望する進路の決定〉を等至点とした。以上より、きょうだいの進路決定プロセスを示した TEM 図は、研究協力者が辿ってきた径路を左から右へ水平方向に流れる時間軸に視覚化して表した。

(2) きょうだいの進路決定プロセスにおける重要な経験と社会的要因

TEM を用いた分析から、きょうだいの進路決定における重要な分岐点となった経験や、その要因となった社会的ガイド及び社会的方向付けについて記述する。

〈志望大学の選択〉における重要な経験と社会的要因：きょうだいの進路決定プロセスから、A 氏、B 氏、D 氏に共通して、障がいのある同胞の存在を友人や恋人に明かすことに葛藤を感じるといった《障がいのある同胞に対する心境の複雑化》に影響を受けながらも、〈同胞が通う特別支援学校の教員との出会い〉を経験し、障がいのある同胞に対して真摯に関わる特別支援学校教員の姿を見るといった《同胞を支援する教員への憧れ》を抱くことや、高校生の頃の進路相談時に《親からの後押し》により、障がいのある者に対する支援を行う教員を志望することにつながっていることが示された。また、B 氏においては母親が病気で入院したことにより、家庭内で同胞のケアを行う役割が不在となるという〈家庭での危機的状況〉を経験し、D 氏においては自らが学校内でトラブルを起こすことにより謹慎処分となるという〈学校での危機的状況〉を経験するなかで障がいのある同胞を支援したいという気持ちや自分に対して真摯に関わってくれる教員への憧れを強め、教員になることの志望を強め、〈志望大学の選択〉につながることを示された。

〈自分自身を見直す〉における重要な経験と社会的要因：志望大学の選択後に、〈学校へのインターンシップやボランティアの参加 (A 氏、D 氏)〉や〈学内実習 (B 氏)〉、〈手話サークルへの参加 (C 氏)〉といった専門や実践に触れる経験から、自分自身の課題に気づき、そのような課題にもとづいて教員を目指すべき否か深く考えるといった〈自分自身について見直す〉経験につながることを示された。そのような自分自身を見直す経験から、〈専門的な分野に関心を強める〉経験と〈自分に教員が務まるのかという不安〉の経験を経て〈進路決定〉に至ることが示された。

4. 考察

きょうだいの進路決定には多くの人生径路があり、多様なプロセスがあることが示された。しかしながら、TEMを用いた分析から、進路決定プロセスにおいて家庭内の家族関係やきょうだい及び同胞の学校の教員との関係性といった他者との関係性の要因が関連していることが明らかにされた。また、大学在学期間中に専門や実践に触れる経験から、きょうだいが自分自身について見直す経験を経て、進路決定に至ることも明らかにされた。これらの結果から、きょうだいの進路決定プロセスに及ぼす社会的要因と自己の見直しのプロセスについて考察することとする。

(1) きょうだいの進路選択プロセスにおいて影響を及ぼす他者との関係性の要因

4名の研究協力者が志望大学を決定する以前に、それぞれ時期は異なるものの、他のきょうだいが同胞の存在に葛藤的な様子を示すこと（B氏）や、同胞に医学的診断がなされる（C氏）、同胞が自分と違う学校に通う（D氏）など、家族関係や同胞をめぐる過程状況の変化を契機に、進路決定において同胞の障がいに対して意識するようになることが示された。さらに、小学校高学年から中高生にかけて、同胞の障がいのことを友人や恋人に理解されないと考え、開示をしない（A氏、D氏）、他のきょうだいと同胞の世話をめぐって喧嘩をする（B氏）など、同胞の障がいに対する心境の複雑化がきょうだいの心理的適応にネガティブな影響を及ぼす可能性が考えられる。一方で、同胞の通う特別支援学校の行事などを契機に、同胞を支援する教員の真摯な関わりに対して憧れを抱き、教員という職業に対する関心を強めることにつながり、志望大学の選択に影響を及ぼしているようであった。さらに、志望大学を決定する際に、多くの研究協力者が、親から「自分の好きに生きて良い」ときょうだいの意向を尊重しながらも、「身近に障がいのある子がいる経験を活かせるのではないか」と勧められること（A氏）が、教員を目指す進路への後押しとなり、志望大学を決定することに影響を及ぼしていることも考えられる。

また、B氏のケースより、母親の病気などの家庭での危機的状況により、同胞のケア役割をめぐって家庭内での個々人の役割の変動が生じることにより、同胞や同胞のように障がいのある者への支援をしたいという思いが高まったことが示された。笠田（2013）は、進路選択の時期は原家族への役割転換の時期であることを指摘しているが、本研究からも高校生などの時期には親の加齢により健康状態などの変化が生じ、家庭状況の変化を経験しやすく、同胞に対するケア役割について家庭内での見直しが生じる時期となりやすいことが考えられる。

加えて、D氏のケースより、自らの通う学校内で問題を起こし、謹慎処分となるなど、き

ようだい自身の学校での危機的状況を経験するなかで、自らが教員から援助されることにより、教員への憧れを抱くようになるなど、自らの教員との関係性が教員への志望を強める影響を及ぼすと考えられる。

以上より、調査前に想定されているように、障がいのある同胞に対して意識するという同胞の存在がきょうだいの進路決定に影響を及ぼす一方で、進路決定時期の家庭での危機的状況や親からの後押しなど同胞とは異なる他の家族との関係性の変化がきょうだいの主体的な進路決定を行うことにつながる事が推察される。さらに、同胞の通う特別支援学校の教員の存在や、きょうだい自身の学校での危機的状況や教員からの真摯な態度による援助など、地域社会で経験する自身の人生のモデルとなる重要な他者との出会いが進路決定に大きく影響を及ぼしていることも推察される。

(2) 大学生の時期における自己の見直し

4名の研究協力者が大学に入学した後に、学校へのインターンシップやボランティアへの参加(A氏、D氏)や、学内実習で障がいのある子どもに対して支援者の役割をもって関わる(B氏)、手話サークルへの参加(C氏)など、専門性や教育実践に触れる経験から、自分自身の不足している点に気づき、教員となる上で今後の課題とすべきことを意識するようになるなど、自分自身について見直すプロセスが示された。大学生などの青年期は、様々な社会的役割を試し、その社会的役割が自分自身に適しているか否かを吟味するといった役割実験を通して、社会のなかで自らの適所を模索する時期であるとされる(Erikson, 1959/2011)。本研究の研究協力者は教員を志望する大学であったため、大学入学後に経験した専門性と教育実践に触れる経験は、支援者という社会的役割に対して自分が適しているか否かを吟味するなかで、自らの課題を意識し、自らの将来への不安を感じることにつながる場合(B氏、C氏)もあるが、専門性を身につけようとするなど志望する職業に対する現実的な将来展望を形成する時期となっていることが推察された。

(3) 今後の課題

本研究では、教員を志望する青年期のきょうだいの進路決定プロセスについて、TEMを用いた分析を行うことにより、事例に特有の文脈と時系列を捨象せずに検討することを目的として調査を行った。その結果、障がいのある同胞の存在がきょうだいの進路決定に影響を及ぼす一方で、同胞とは異なる他の家族との関係性の変化、教員などの地域社会で経験する自身の人生のモデルとなる重要な他者との出会いが進路決定に大きく影響を及ぼしていることも考察された。また、大学生の時期は支援者という社会的役割を試行する経験を通して、将来に対する不安を抱えながらも、専門的な分野に対して関心を強めることにより、自らの志望する職業に

対する現実的な将来展望を形成することが考えられた。

しかしながら、本研究は回想的に語られた内容をもとに行われた分析であるため、現在の志望する職業を到達点として設定した上で語りが構成された可能性が高く、今後も研究協力者の志望の変化により、その語りが大きく変化する可能性がある。また、昨今では特別支援教育や障がいのある者を取り巻く制度などの社会的情勢は大きく変化しており、本研究の知見が今後のきょうだいの進路決定に対しても妥当性をもつかどうかを検討することが必要であると思われる。また、本研究の研究協力者は全員が教育学部の教員を志望する大学生であったため、障がいのある者を支援しようという意欲を強くもつ者が調査対象となっていた。そのため、本研究の研究協力者の進路決定においては、対人援助職を志望しないきょうだいよりも、障がいのある同胞の存在や同胞に関わる教員の存在が相対的に大きな影響を持っていた可能性が考えられる。したがって、他の職種を志望するきょうだいを対象として、本研究の一般化可能性を検討することも今後の課題と言えよう。

付記

本研究は第一著者の卒業研究の一部を再分析し、論文としてまとめたものです。論文として執筆することができたのは、現熊本大学教育学部の本吉大介准教授や、ともに切磋琢磨してきたゼミ生の皆さん、インタビューを通して貴重な経験を語ってくださった4名の研究協力者のおかげです。この場を借りて、皆様へ心からの感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ. (2012). 複線経路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. *立命館人間科学研究*, **25**, 95-107.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and The Life Cycle*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H.・西平直・中島由恵. (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル*. 東京: 誠信書房.)
- 藤井和枝. (2006). 障害児者のきょうだいに対する支援 (1). *関東学院大学人間環境学会紀要*, **6**, 17-32.
- 平川忠敏. (1986). 障害児の同胞. *幼年教育研究年報*, **11**, 65-72.
- 笠田舞. (2013). 知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス: 中年期きょうだいにとって、葛藤の解決及び維持につながった要因. *発達心理学研究*, **24**, 229-237.
- 益満成美・江頭幸晴. (2002). 障害児のきょうだいにおける否定的感情表出の困難さについて. *鹿児島大学法文学部人文科学論集*, **55**, 1-13.
- Meyer, D. (2009). *Thicker than Water: Essays by Adult Siblings of People with Disabilities*. Maryland: Woodbine House.
- 中坪太一郎. (2010). 統合失調症患者の家族の心理的プロセス: 「期待」と「不安」を繰り返す構造に着目して. *家族心理学研究*, **24**, 1-15.
- 西村辨作. (2004). 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題. *児童青年精神医学とその近接領域*, **45**, 344-359.
- 大瀧玲子. (2012). 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観: きょうだいが担う役割の取得に

- 注目して. 東京大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 235-243.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Valsiner, J. (2006). 複線径路・等至性モデル：人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. *質的心理学研究*, **5**, 255-276.
- Simeonsson, R. J., & McHale, S. M. (1981). Research on handicapped children : Sibling relationships. *Child : Care, Health and Development*, **7**, 153-171.
- Vadasy, P. F., Fewell, R. R., Meyer, D. J., & Schell, G. (1984). Siblings of handicapped children : A developmental perspective on family interactions. *Family Relations*, **33**, 155-167.
- 山本美智代・金壽子・長田久雄. (2000). 障害児・者の「きょうだい」の体験：成人「きょうだい」の面接調査から. *小児保健研究*, **59**, 514-523.